

市場経済との遭遇

—フィリピン先住民にみる排除の構造—

吉田 舞

1991年、フィリピンのピナトゥボ山が噴火した。この噴火を機に、周辺地域の産業構造と労働市場は大きく変容した。本稿は、この過程で急速に市場経済に参入することになった先住民アエタを事例に、市場社会における排除の過程と構造について考察する。アエタは、火山の噴火後、伝統的な山仕事から平地¹⁾の仕事へ移った。同時に、アエタは平地の労働市場で、劣った能力しか持たない安価な労働力²⁾として、排除されることになった。他方で、アエタは、市場社会での苦しい生活から脱出するため、市場的価値を受容していった。このようにアエタは、文化的にも市場社会へ取り込まれていった。その結果、アエタは生活向上が阻まれる市場社会において、ますます貧困化の道を歩み続けることになった。

ここに、「文化的強調と社会構造の結びつき」(Merton 1949=1961: 135)をみることができる。それこそ、市場社会における排除を持続させているものである。しかし、従来の社会的排除論は、社会政策の脈絡で議論されることが多かったため、社会構造(労働市場)からの排除に焦点が当てられてきた。これに対して、本稿は、市場社会におけるアエタの排除の両面的な(社会/文化)構造を考察する。つまり、アエタの労働環境などの「社会的なもの」だけではなく、人々が市場的価値へ適応していく「文化的なもの」にも着目し、市場社会における排除の過程と構造を明らかにする。

キーワード：先住民，社会的排除，文化的包摂

1 調査対象の説明

アエタ Aeta は、およそ 25,000 年前の後期旧石器時代に、アジア大陸部から渡来したフィリピン最初の先住民である。現在、ルソン Luzon 島中部のピナトゥボ Pinatubo 山周辺には、2~3 万人のピナトゥボ・アエタ（以下、アエタ）が住んでいる。アエタは、ネグリート系の先住民で、身長が低く、縮毛で暗褐色の肌など、平地民と異なる身体的特徴を持つ人々である。また、ピナトゥボ・アエタは、先祖伝来の土地にアメリカの空海軍基地が設置された、ピナトゥボ山の噴火で重大な被害を被ったなどの歴史的体験を持っている（吉田 2012）。本稿は、とくに市場社会におけるアエタの労働に着目して考察を進める。そのため、地域の経済開発によって雇用が増加しているサパ Sapa 集落（仮名）³⁾ のアエタを分析の対象とする。

本稿は、「差異を持つ人々」が、市場経済に適応しつつ底辺化していく過程と構造について考察する。本稿がアエタを考察の対象とした理由は二つある。一つ目は、アエタが急速に（短期間に）市場社会への適応を迫られたという事情である。本来、「伝統的目的に向けられた生産活動から『合理的』な収益活動への移行は、ゆっくりと漸進的にしか、実現しない」ものである（Bourdieu 1977=1993:10）。しかし、サパのアエタが、平地の市場社会に本格的に参入し、市場経済に依存するようになったのは、1991年にピナトゥボ山が噴火した後のことである。さらに、サパに隣接する空軍基地は、ピナトゥボ山の噴火後に経済特別区 Clark Freeport Zone に転用されていった。同時に、クラーク国際空港が、マニラのニノイ・アキノ Ninoy Aquino 国際空港に次ぐハブ空港として就航することになった。それにともない、サパでも、2000年に入って、外国人経営者による観光開発が始まった（吉田 2010, 2012）。サパのアエタは、このように地域経済が変容するなかで、建設業や観光業の仕事に就くようになった。さらにサパには、国内外からの援助団体 NGO が入った。こうして、集落にはヒトとモノが溢れていった。そしてアエタは、20年余りの間に、山仕事に依存していた生

活から、市場経済へ、そして地域開発の進行とともに、グローバル経済のなかへ放り出されていった。アエタの市場経済との遭遇は、かつて平地民が経験したのとは異なり、急速にヒト・カネ・モノに巻き込まれるものであった。アエタは、このようななか、市場社会の経済的性向 (Bourdieu 1977=1993:5) を持つことを求められた。ここで「適応」とは、市場で求められる価値や能力などの経済的性向を、人々が身体化していくことをいう。

二つ目は、市場社会において、アエタの「市場的／文化的な差異」が「異質な」ものとして差異化されていることである⁴⁾。ここで市場的な差異とは、市場社会が求めている能力や技術を持たないことをいう。その能力や技術とは、仕事の獲得に必要な学歴や職歴、言語 (タガログ語および英語)、コミュニケーション能力、パソコンスキル、身体的条件 (身長制限、肌の色)、準備資金などをいう。他方、文化的な差異とは、市場社会で生きるために必要な価値観を持たないことをいう。そこには、まず人々の労働価値が含まれる。それらの差異は、市場社会のなかで異質なものと認識されるだけでなく、低位なものとして差異化され、安価な労働力の理由づけとなっている。このようにアエタは、市場的にも文化的にも、「異質」という烙印が押された人々となった。また、アエタの消費価値も、市場的なものへと変容した。ところがアエタは、消費活動を行うために市場社会で必要とされる「合理的計算」能力を持たない。また、消費に必要な現金収入の機会を持たない。このような文化的差異と社会・経済的要因の結果、アエタは市場社会において厳しい状況に置かれていく。つまり、アエタは、労働市場から排除され、同時に、市場的価値への適応の圧力を受けている。

本稿は、次のような構成をとる。2節では、従来の社会的排除論と、ジョック・ヤング (Jock Young) による文化的包摂の議論を参照したうえで、本稿の位置を特定する。3節では、アエタの労働に関するデータを用いて、彼／彼女らが置かれている社会的排除について、社会構造の側面から分析する。4節では、アエタ自身の労働価値と消費価

値の意味づけの変容に着目し、アエタの市場的価値の受容という文化構造の側面について分析する。5節では、構造的な排除（3節）と文化的な包摂（4節）の議論を踏まえて、市場社会におけるアエタの排除の過程と構造についてまとめ、最後に、本稿に続く課題を提示する。

2 「差異を持つ人々」の排除

近年、経済のグローバル化にともない、労働市場の変容や、移民など、人々の移動の増加や、「新たな貧困」や社会問題が着目されてきた（Bauman 1998=2008, Castells 1999）。そして、このような新たな社会問題を捉えるために、さまざまな領域において排除と包摂をめぐる議論が行われてきた（Bhalla and Lapeyre 1999=2005, Byrne 2005=2010, 西澤 2010, 岩田 2005, 2008, 福原 2007, 関 2013）。先行の社会的排除論においては、社会的排除の語が、国家（権力）が社会的に排除された人々の実態を把握する「政策の言葉」（岩田 2008:20）として用いられてきたこともあり、人々がいかに排除されているか、逆に、いかに包摂されているかというかたちで、社会的排除の問題が、労働市場、市民社会、国家など、社会構造の諸側面から考察されてきた。

他方で、ヤングは、社会構造だけではなく、人々の価値世界にも着目し、近代の社会を「吸引と排斥を同時に行う社会」（Young 2007=2008:68-9）と特徴づけた。ヤングがいう「吸引」とは、政策的な含意を持つ社会的な「包摂」とは異なり、排除された人々こそが、支配的価値に取り込まれていることを指す概念としてある（文化的包摂）。ヤングは、ロバート・K・マートン（Robert K. Merton）のアノミー論を援用し、アンダークラスに多くみられる犯罪が、文化的包摂と社会的排除の双方によって生じているという（Young 2007=2008）。「差異を持つ人々」は、差別や貧困ゆえに排除されているだけではない。また、そのような排除ゆえに、文化的欠如や、貧困の再生産が起こっているわけでもない。排除された人々は、その境遇（貧困、差別など）を受容し、そこから脱出するために、国家や市民社会、労働市場で承

認された価値や能力を、積極的に身につけようとする。ヤングは、人々が疎外されている現象を見るだけではなく、人々がどれほど支配的価値や文化を身につけようとしているかという点こそ重要であるという。つまり、社会のなかで疎外されている人々の適応への意欲は、「経済的・社会的に排除された結果、弱まるどころか、むしろ強まっている」(Young 2007=2008: 213-214)。人々は、市場的価値を受容し、新たな生活目標を立てるものの、その目標達成のための手段や資源を持たない。しかし人々は、みずからをそのような状態に置いている社会自体を受容しているがゆえに、彼/彼女らは、いつまでも過酷な生活に留まることになる。このように、ヤングは、社会のなかで排除されている人々の境遇を、社会構造の側面からだけではなく、人々の価値世界の側面からも考察している。

本稿においても、雇用形態や労働環境など、社会構造的な排除の実態に着目するだけではなく、ヤングのいうような、排除された人々の価値世界にも着目する。それは、「差異を持つ人々」の価値観を支配的価値に取り込み、人々の内側から支配していく市場社会の力を可視化させるためであり、また、そこに適応しきれない人々の境遇を描き出すためでもある。アエタも、市場経済に適応することを迫られている。彼/彼女らは、ピナツボ火山の噴火や、それによる地域労働市場の変容といった外的な諸要因によって市場社会へ押し出された。彼/彼女らは、現金収入を得るため、伝統的な山仕事ではなく、平地の仕事に就くようになった。そして、市場社会に生きることで、成功や出世という、新たな目標を抱くようになった。(収入が)安定した生活を目指す親は、子どもに学校教育を受けさせるようになった。アエタの消費価値も変容し、生活するうえでの必需品や「購入したいもの」は、増えるばかりとなった。このようにアエタは、たんに火山の噴火という物理的な要因によって市場社会に押し出されただけではなく、彼/彼女らの内面の価値観も、市場的なものへ取り込まれていった。このようなアエタの境遇に、市場社会が「差異を持つ人々」の価値観までも支配的価値に取り込んでいく様子を見ることが出来る。他方で、アエ

タは、市場が求めている能力や価値を持たない、安価な労働力として労働市場に取り込まれている。その結果、アエタは、成功や出世などの新たな目標を達成したり、生活のなかで出てきた新たな欲求を満たす手段を得ることができないまま、ますます厳しい貧困の境遇に追いやられている。アエタは、市場社会に適応しようとするほど、厳しい境遇に追いやられていく。市場社会における「差異を持つ人々」の排除は、このように繰り返されている。

ここに、アエタの「文化的強調と社会構造の結びつき」(Merton 1949=1961 : 135)による、排除の過程と構造をみることができる。ただし、フィリピンの先住民アエタの排除の状況と、ヤングが対象にしたアメリカの移民や黒人若者のそれとには、相違点もある。それは、アエタが、市場的な価値を身体化する間もなく、急速に市場社会への適応を迫られたという点である。アエタが市場社会において困難な状況に置かれているのは、先住民に配慮した労働政策がないことや、給料の安い仕事にしか就けないという社会構造上の理由によるだけではない。市場社会において成功するためには、経済的な資源や手段を獲得することが必要になる。そのためには、合理的な予測や計算の能力が求められ、また、市場的な価値や身体を持つことが求められる。しかしアエタは、市場的価値を取り込もうとするが、これまで培ってきた価値や身体と、市場で求められているそれらとの間で苦闘する。市場的価値の身体化こそ、市場社会がその成員に求めているものである。ただしアエタは、突如として、それまで身体化されてきた「暮らしの論理そのものが通用しないコンテクストに投げ出され」(石岡 2013:4)た人々である。したがって、同じように文化的に支配的価値に包摂されても、市場経済に遭遇した期間の長さを考えると、何世代にも亘って市場社会を生きてきたアメリカの移民や若者と、短期間で適応を迫られたアエタが市場的価値に浸食されていった様は、質的に異なるものである。また、アエタの生活の変容は、同じようにピナトゥボ山の噴火で生活基盤を失い、避難生活を強いられ、新たな環境のもとで生活を立て直そうと奮闘した平地民の生活の変容とも、異なるものであ

る。

本稿は、このような仮説（的思考）のもと、市場社会におけるアエタの境遇を、次の方法で考察する。まず、市場社会におけるアエタの境遇を、労働環境や制度、貧困などの「社会的なもの」と、アエタの価値世界である「文化的なもの」とを区別する。次に、アエタが、市場経済に適応すればするほど貧困化していく過程に着目する。本稿は、これらを通して、市場経済において「差異をもつ人々」が排除され続ける構造を明らかにする。

なお、本稿では、2000～2013年にフィリピンのパンパンガ Pampanga 州アンヘレス Angeles 市のサパ Sapa 集落（仮名）で行った、参与観察およびインタビューのデータを用いる。参与観察では、2000年に6ヶ月、2001～2013年に毎年、それぞれ2～3週間滞在し、畑仕事や家事を手伝いながら、そのなかで交わされた会話をフィールドノートに記録した。また、本稿で用いる口述資料は、2012年と2013年にフィリピン語およびアエタの言語（マガンチ・アエタ Mag-Anchi Aeta）で行い、必要に応じてアエタの通訳を依頼した。本稿では、口述資料の使用は最小限に留めるが、諸事実の解釈は、参与観察と面接のデータを参照して行った。本稿に登場する村落と人物は、すべて仮名とする。

3 地域労働市場における排除

3.1 労働市場への参入

サパのアエタは、市場社会に参入する前は、狩猟採取や焼畑を行い、自給自足の生活を送っていた。しかし、第二次世界大戦後の1951年に、アエタは集落ごと、アメリカ軍が指定した集住地に移動させられ、基地の守衛や雑用係として働くようになった。当時のアエタは、食糧はアメリカ軍に分けてもらうこともあったが、基本的には山仕事に依存していた。しかし、ピナトゥポ山の噴火後、クラーク空軍基地の経済特別区への転用を契機に、サパ周辺の地域労働市場が、急変していった。火山灰に覆われた基地では、商業エリアとしての復興に向けた経

済開発が、急ピッチで進められた。それにともない、周辺地域は、農業や基地に関係した産業から、グローバル経済に直結する工業や観光、サービス業へ変容していった。1997年には、先住民権利法 Indigenous Peoples Rights Act (IPRA)による雇用政策⁵⁾が始まった。サパのアエタの仕事も、伝統的な仕事(畑仕事や産婆)から、雇用労働化、ガイドやマッサージ師などの専門化が進んだ。このように、アエタが市場社会へ参入していった背景には、クラーク周辺地域の経済発展や労働市場の変容と、政府の先住民政策によるアエタの雇用機会の増加があった⁶⁾。

このように、1991年以降、急速に市場社会に編入していったアエタであるが、その労働市場では、アエタが山仕事で培ってきた労働技術や能力、身体的特徴⁷⁾や労働価値は、前近代的で低位な労働力/価値として認知されることとなった。2000年代に開発事業が始まり、学校教育は普及していったが、サパの非識字率は、いまなお高く、とくに30代以上の世代では、識字や計算に対して不信感や恐怖心さえ抱くアエタもいる。また、サパではアエタの言葉(マガンチ・アエタ)と地方のパンパンガ語が話されていたため、公用語であるフィリピン語や英語を、仕事で使えるほどのレベルで話すことができるアエタは少なかった。

また、市場的資源の差異もある。たとえば社会福祉が保障されている仕事では、応募の際、複数の関係書類の提出が求められるし、証明書の発行手数料のほか、交通費などの準備資金⁸⁾が必要となる。アエタが働く経済区内の清掃や、サパのリゾートでも、他の平地の仕事に比べると提出書類は多くないが、労働者の婚姻証明書や家族の出生証明書は、かならず求められる。しかし多くの場合、アエタは、結婚や子どもの出生時に届け出をしていないため、各機関に罰金を払って事後登録というかたち形で取得する。このように、市場社会においてさまざまな差異があり、アエタは、それらの制約を受けることになる。

3.2 雇用環境における差異化

クラーク経済特別区では、基地時代の最盛期の約3倍にあたる11万7,000人の雇用が創出された。しかしそれでも、アエタが、最低賃金や社会保障がある工場労働やサービス業に就くことは、ほとんどない。アエタは、守衛や清掃係、同地区で働く平地民の家事手伝いなど、インフォーマルな仕事に就くことが多い。他方で、「先住民アエタ」であることが、就職に有利になることもある。たとえば、サパのリゾートでは、アエタ文化や「先住民」との交流が売りになっており、スタッフやガイドも、アエタが優先的に雇われている。しかし、そこでの雇用条件や労働環境も、不安定なものである。

アエタと平地民の労働者としての差異は、収入や雇用形態に現れている。たとえば、サパを含むパンパンガ州の法定最低賃金（サービス業・製造業）は329ペソ/日（9,212ペソ/月）である（1ペソは約2円）（DOLE 2012）。しかしアエタでは、健康保険や住宅ローンなどの社会保障がついた安定した仕事（リゾートや空港など）でも、平均月給は4,000～8,000ペソにしかならない。表1からも、多くの仕事で、法定賃金と大きな開きがあることが分かる⁹⁾。この賃金では、一人の働き手だけで一家（平均5～6人）の生計を賄うことはできない。したがって、多くのアエタは、単発的な仕事を組み合わせることで生計をやりくりしている（吉田 2012）。また、アエタの差異は、雇用形態や労働条件にもみられる。フォーマルな雇用であっても、契約書に署名はするが、契約内容を知らされない、試用期間中の数ヶ月は休みが取れない、試用期間が終わっても月休が2日しか取れない、残業代が支給されないなど、不当な働き方が求められている。また、契約期間が5ヶ月以下の非正規雇用が、常態化している¹⁰⁾。他方、家事手伝いなどのインフォーマルな仕事では、帰宅時に家のものを持ち出していないか、身体や荷物をチェックされたり、飼い犬と同じスペースに寝かされるなど、プライバシーや人権を無視した労働環境に置かれることもある。このように、労働環境や雇用形態を通して、市場社会における労働者としてのアエタの差異化が実践されている。これが、社会構造の側面

からみた、市場社会におけるアエタの位置である。

表1. サバ・アエタの収入と雇用形態(2013年現在)

職種	労働者の特性	収入(月平均ペソ)	雇用形態	福利厚生	勤務日・時間
内職	女性、子ども、高齢者	P100-500	自営	-	不定
産婆	50代 女性	P100-2000	-	-	不定
NGO・町役員	30代 女性、50代男性	P1000-1500	契約	なし	不定
洗濯業	20-50代 女性	P1800-2000	日雇い	-	週1-2日・半日
家畜	家族	P2000	自営	-	不定
ガイド	20-50代男性	P2400	日雇い	なし	週1-2日、半日
民族衣装モデル	50代男性	P2500	自営	なし	不定
ヘルスワーカー	30代 女性	P2500	3年任期	なし	不定
山仕事	60代以上、18歳以下、障害者等	P2000-4000	-	-	不定
家事手伝い	10-20代男性	P3000	1年契約	なし	不定
家事手伝い	10-20代 女性	P3000	1年契約	なし	終日
幼稚園教諭	30代 女性	P3000	-	なし	平日、午前中
守衛	20代男性	P4000	5ヶ月契約	あり	17時-5時(夜勤)
土木建設	10-30代男性	P4800	週雇い	なし	週7日、8-16時
セラピスト	10-20代女性	P4000-5000	5ヶ月契約	あり	8-17時(残業有)
空港清掃	40代男性	P5400	一年契約 (福利厚生あり)	あり	平日 8-15時
レストラン	10-20代	P4000-5500	5ヶ月契約	あり	8-17時(残業有)
軍隊関連	20代男性	P6000	契約	あり	隔週5日勤務
観光業	50代男性	P8000	正雇い	あり	8-17時(残業・当直有)
土木業(集落外通い)	20代男性	P11000	一年契約	あり	平日 8-15時

(吉田 2012 から一部抜粋, 表記修正)

3.3 労働内容における差異化

次に、仕事の内容や労務管理の点で差異化された、アエタの仕事の現状についてみる。表2は、サバで雇用労働に就いているアエタの仕事内容をまとめたものである。

表2 サバのアエタの仕事内容

職種	仕事の内容
1 洗濯業	衣服やシーツの洗濯
2 清掃業	剪定やガーデニング
3 家事手伝い	犬の世話、子守、皿洗い
4 守衛	施設内を歩いて見張り
5 軍の訓練補助	訓練中の道の整備(木や雑草を切って道を作る)
6 NGO・町役員	プロジェクトに参加するアエタのとりまとめ、相談役
7 リゾート管理職	アエタ従業員のまとめ役、相談役
8 空港メンテナンス	滑走路の石拾い、鳥を追い払う(飛行機と鳥衝突防止のため)
9 ガイド	野草や生き物の説明、荷物持ち、写真撮影係
10 レストラン	皿洗い、料理の見張り
11 建設	火山灰の撤去、ペンキ塗り、木材運搬
12 リゾート	マッサージ、砂蒸し風呂の砂や木炭の運搬

平地民に雇用されるアエタの仕事の中身は、動物や植物、山に関係した肉体労働など、山仕事の延長のようなものや、荷物持ちや守衛、皿洗いなど、とくに高度なスキルを必要としないものが多い。また表2では、一番下の欄のリゾートのマッサージの仕事だけが、2ヶ月の研修を受けているが、その他の仕事では、研修や職業訓練はなく、雇用されたその日から実務に就いている。ここからも、雇用主が、アエタの仕事にそれほど高い技術を求めていることが分かる。

他方、アエタの労務管理については、上司や同僚との間で最低限の意思疎通ができる言語能力や、身だしなみ、時間管理の指導などに重点が置かれている。とくにリゾートや経済特別区の仕事においては、遅刻や欠勤だけではなく、休憩時間と労働時間の区別が、厳しく指導されている。これに対して、平地民の労働者であれば提示される労働契約の内容や、給料形態などの説明も、アエタに伝えられることはない¹¹⁾。したがって、給料日が分からない、給料からなにが天引きされているのか分からない、いつ仕事を休んでいいのか分からないというアエタが多い。ここから、雇用主が、アエタに契約内容をきちんと伝

えていないことが分かる。

これらの事実から、雇用主が、アエタに平地民の労働者と同じ能力（事務作業や運転手、設計をとまなう建築作業など）を求めるのではなく、低位な労働者としての差異を持ったまま、平地の労働スタイルや、市場的な労働価値に適應させようとしていることが分かる。つまり、雇用主にとって、差異をもったアエタを労働者として雇用する意義は、アエタをいつでも使い捨てできる便利な、つまり低賃金で、法律を無視して雇うことができる労働力として扱うことにある。

4 市場的価値の受容

4.1 労働価値

次に、市場社会におけるアエタの境遇を、「文化的な」側面からみていく。ここで文化的とは、アエタが市場的価値を受容すること、もしくは受容しようとしていることをいう。アエタは、市場的価値をどのように捉え、受容しているのだろうか。以下の語りは、2003年と2012年に、山仕事についてインタビューした際のベルの言葉である。

私たちは山で仕事をしてるわよ。今はパイナップルを植えているの。子どもはまだみんな小さいけど、もう少し大きくなったら、しっかり手伝いをさせるわ。そうしたら、子どもたちも将来は、山で仕事ができるようになるでしょ。(Bel, 40代女性 2003.03.18)

当時のベルは、将来、自分の4人の子どもと山で仕事をするのを楽しみにしていた。しかし、長女がハイスクールを中退し、リゾート・スタッフとして働き始め、他の息子たちも学校に通い始めたため、自分も山仕事を控えるようになった。その後、ベルは子育てが落ち着いたが、子どもたちが学校を中退した頃を、次のように振り返っている。

以前、息子が学校を中退したときも、娘が山仕事を手伝いたいからって学校に行かなくなったときも、いっしょに山仕事についてきてただけだね。山仕事している子どもらを見て、涙が出たものよ。「私はあんたたちにこんな仕事はさせたくないのよ。なんで畑仕事なんかしてるのよ」って泣いたわ。子どもらには山仕事じゃなくて、学校に行ってほしかったの。(Bel, 50代女性, 2012.03,10)

ベルは9年前、将来は子どもに山仕事をさせたいと考えていた。しかし、現在の彼女にとって、山仕事は、子どもにさせたくない仕事になっていた。この変化の背景には、サパにおいて現金収入の機会が増え、ベル一家の生活が、ますます現金を必要とするようになっていたことがある。また、なによりもベル自身が、子どもたちを育てるために、現金収入の機会を求めて苦勞していた。このような経験は、ベルに限ったことではない。こうしてサパのアエタは、行政や教会、ボランティア団体による生計向上などの研修に積極的に参加し、子どもには学校教育を受けさせ、職業威信が高く稼ぎがいい仕事に就くことを理想とするようになった。このように、多くのアエタが平地民に雇用されて働くようになったが、職場では、これまで培ってきた価値と市場的価値が衝突することになった。

山にいるときは時間なんて気にする必要はなかった。体調が悪いときには、だれに断りを入れる必要もなく休めた。でも、平地ではそうはいかない。それでも、アエタはそんなことに慣れていないから、山の感覚で働いてしまうんだ。そうすると、以前の働き方と、平地で求められる働き方との間でコンフリクトが起きてしまう。平地では15分遅れただけで上司から文句を言われて、それが重なるとクビになることもある。だから、山は山、平地は平地の働き方に合わせないといけなのさ。(Martin, 20代男性, 2013.03.03)

マルティンの祖父は、現在も山仕事を続けており、彼は、幼い頃から山での生活について聞かされてきた。他方で、マルティンは、教会学校の教師を務めており、これまでも、教会関連の生計向上セミナーに何度か参加している。彼は、アエタ的な労働価値と、平地の労働価値の違いを認識しており、平地で働くときは、平地に感覚を「合わせないといけない」と思っている。実際に、「価値のコンフリクト」の結果、平地の働き方に合わせるができないで職を失うアエタも、少なくない。筆者の調査中にも、家族が怪我をしたり、急に隣村に行かなければならなくなると無断欠勤をしたり、事後報告をしたり、勤務時間中に家に帰ったりしてクビになったアエタがいた。

わしの息子も、孫がサン・フェルナンド San Fernando (近郊都市)で入院したんじゃよ。それで一週間休んで、また仕事しようと思ったけど、もう雇ってくれなかった。そういう感じなんじゃよ。いくら平地の仕事のスタイルを学ぶべきだって言われても、緊急のことなのに前もって休みの許可を取らないといけないとか、子どもが死にそうになっているのに、仕事に出てこいとか、そんなのはむずかしい話じゃよ。(Bobong, 80代男性, 2012.10.07)

ボボンの息子は、リゾート・スタッフの仕事をしていた。マルティンと同じく、彼も、職場では、時間や約束ごとを厳守するという類の、「平地の仕事のスタイル」を身につけることの必要性を知っていた。そのため、許可は下りなかったが、子どもの入院が決まるとすぐに、上司に休みたいと掛け合った。そして休みがもらえないので、無断で欠勤した。一週間の欠勤の後、彼は、職場に戻って働こうとしたが、もはや戻る場所はなかった。アエタの世界ならば、急に仕事に行かなくなっても「なにかあったに違いない」と解釈されたり、家族の病気ならば、そちらを優先するのは当然とされてきた。ここに、平地の労働価値を取り入れようとはしたが、結局自分の価値を選択したため、

職場を追われてしまったアエタの姿がある。

先のマルティンの話を筆者の隣で聞いていたベル (Bel) は、インタビューの終了後、アエタが平地の働き方に合わせることに、次のように語った。

たしかに、マルティンはいいこと言ってるよ。本当よ、平地で働くなら時間の管理もしないといけないし、そのためのトレーニングも必要だろうと思う。でも、いくらトレーニングといっても、それを受け入れられるかどうかは、結局、その人次第よ。いくら（トレーニングを）しないといけないと分かっているけど、本人にできなかつたら意味ないよ。これまで何度もトレーニングを受けてきたけどね。いまだに平地民から、手でご飯を食べるなどか、平地に行くときはシャワーを浴びろとか言われるのよ。アエタの文化は尊重するべきだと思うけど、悪いアエタの文化は止めるべきだってさ（鼻先で笑うように）。でもね、そんなこと急に言われたってできないわよ。だって、私はアエタだもの。（Bel, 50代女性, 2012.03.21 括弧は筆者）

ベルも、「平地で求められている働き方」を受け入れることが「いいこと」であり、「しないといけない」ことであると分かっている。しかしベルは、これまで幾度となく、アエタの価値と市場的価値のコンフリクトを経験しており、市場的価値に適応することのむずかしさを、身をもって知っている。「本人ができなかつたら意味ない」というのは、ベルの体験談でもあった。

ベルには、ピナトゥボ山の噴火後、サパの生活協同組合を立ち上げたり、マニラや平地で商売をするなど、市場社会で生きるために悪戦苦闘したが、ことごとく失敗してきた（青木 2004）。したがってベルは、市場的価値に適応することは「いいこと」ではあるが、「そんなこと急に言われたってできない」ことも知っている。また彼女は、アエタの価値を「悪い文化」だと言う平地民の言葉を鼻先であしらい、あ

えて自分が「アエタ」であることを宣言している。

このようにベルは、価値のコンフリクトに遭遇して、市場的価値に適応できない自分が「アエタ」であることを、再確認した。従来のエスニシティ研究ならば、このような「アエタ」意識の覚醒に、エスニシティの強靱さや、民族的な誇りを見出したり、ベルのような言動を、市場社会に生きるアエタの「抵抗」と捉えたかもしれない。しかし、圧倒的な市場社会の力は、そう簡単にアエタの抵抗を許すようなものではない。それどころか、アエタであることは、市場社会に適応できないことを正当化する方向で機能する。アエタは、家庭の事情で無断欠勤をする、勤務時間中に家に帰る、トレーニングに順応できないなどの体験を、アエタだからそれも仕方ないと解釈する。そしてそれは、彼/彼女らのコンプレックスになっていく。

したがって、「私はアエタだもの」というベルの言葉から、アエタ自身が、「市場社会に適応していくためには、アエタ的なものを捨てなければならぬ」という市場的な価値を受容している一方で、「アエタであることから逃れられない」という、アエタの厳しい現実が浮かび上がる。

4.2 消費価値

次に、アエタの消費価値の変容についてみていく。アエタが市場社会で貧困化しているのは、低賃金や労働条件だけによるものではない。ここでは、アエタが市場的価値をどのように受容しているかを見るため、さらに、アエタの消費価値の変容に着目する。サパで現金収入の機会が増え、現金を使わなくてもよかったところに現金が必要になってきた。またそのなかで、人々の欲望も高まってきた。火山の噴火後、アエタが避難先からサパに戻ったとき、そこには現金収入の機会はほとんどなく、人々は、ふたたび山仕事に頼って生活をしていた。しかし、2013年現在、山仕事だけで生計を賄っている家庭はない。そのような変化の背景には、3章でみたような、労働市場の変容や、ピナトゥボ山噴火後の経済開発が関わっているが、それにともない、アエタ

の消費（に対する）価値も変わってきた。表3は、2003年と2013年の、サバの3家族が所有する物の一覧である。

表3. 住居と家具の定容

		2003		2013	
		住居の種類	家具・電化製品など	住居の種類	家具・電化製品など
A家	屋根:トタン板、ニッパ 床:土間 部屋数 2部屋 台所	食器、鍋、中華ヘラ プラスチック製衣装ケース 木製タンス 木製食卓テーブル、長椅子 トランシーバー 発電用バッテリー	セメント(トタン屋根、コンクリ床、壁はブロック)	食器、鍋、中華ヘラ テレビ 携帯電話 食器入れ 木製タンス プラスチック製衣装ケース ガスコンロ、炊飯器、電気コンロ、洗濯機、脱水機 プラスチック製椅子	
B家	ニッパハウス(竹、ニッパの葉等の天然素材、土間) 部屋数 1部屋 台所	食器、鍋、中華ヘラ プラスチック製衣装ケース 木製食卓テーブル、長椅子	セメント(トタン屋根、コンクリ床、壁はブロック)	食器、鍋、中華ヘラ テレビ カラオケセット ソファセット一式 プラスチック製衣装ケース 竹のベッド 炊飯器 木製タンス プラスチック製椅子 扇風機	
C家	ニッパハウス(竹、ニッパの葉等の天然素材、土間) 部屋数 1部屋 台所	食器、鍋、中華ヘラ 木製食卓テーブル、長椅子	セメント(トタン屋根、コンクリ床、壁はブロック)	食器、鍋、中華ヘラ テレビ 携帯電話 冷蔵庫 炊飯器、ガスコンロ トライシクル(荷台付きバイク) プラスチック製椅子	

サバでは、2003年頃から観光開発のためのインフラ整備が進み、同年6月には電気が通り、アエタの生活は一変した。表3にみるように、個々の家では、電化製品や家具が増えた。噴火後、平地の支援団体が、アエタを対象に、42棟のコンクリート製トタン屋根の家を提供した。しかし、新しい家屋は、従来の住居と間取りや仕様が異なっており、アエタの生活様式も変わっていった。たとえば、これまでの家では、風通しの良いニッパなどの自然素材を屋根や壁に用いていたが、熱がこもるトタンやセメントに変わった。かつての間取りは、寝室以外は土間が中心であったが、支援団体が提供した家には土間がなかった。そのような間取りでは、家のなかで木炭を使う調理ができなくなった。そこで、時間をかけて火をおこさなくても料理ができる炊飯器や、ガスコンロが普及した。しかし、ガスボンベは一本300ペソもするうえ、

市場からの運搬費が嵩む。また、土間がなくなった部屋を飾るため、平地の家のような、ソファやラジオ、テレビなどのリビング・セットが好まれるようになる。B家のネルソン(Nelson)は、次のように言う。

いまの家を(支援団体に)もらったとき、しばらくは落ち着かなかったよ。自分の家なんだけど、自分の家じゃないみたい。なにせ、家具もないし、リビングもがらんとしていてね。平地からお客がきても、地べたに座ってもらわないといけない。あれは恥ずかしかったなあ。そこで、まずリビング・セットを買ったんだ。(Nelson, 40代男性, 2013.03.21 括弧は筆者)

これまでは来客があったとき、家の外で地べたや長椅子に座って話をしたり、土間にあった食卓テーブルと長椅子を囲んで話をすることが多かった。しかし、土間がなくなり、リビングのある間取りになると、これまでのように台所のテーブルで接客したり、地べたに座ってもらうことは「恥ずかしい」接客の方法になった。このように、アエタの人々の意識や生活様式は、変容していった。

また、表のC家では、サパのアエタ家庭では珍しいことであるが、トライシクルという荷台付きバイクを購入した。しかしこれも、ガソリン代や維持費がかかる。プリペイド式の携帯電話も普及したが、電話をかけるためには料金をチャージしなければならない。このように、人々は、毎日なにかしらの出費が必要な暮らしをするようになった。アエタの生活に、必要なものやほしいものが増加した。

この食器の水切りは夫の給料で買ったの。昔はお金が入って家のものを買おうなんて考えたことがなかったわ。ただ、家族が毎日食べられて、子どもらが無事に育ってくれればいいって思うだけだった。でも、最近は収入が入って少しでも自由になるお金が出来たら、こうやって一つずつ、家で使うものを買うことにして

るの。(Teresia, 50代女性, 2013.03.05)

家具を揃えていくっていうのもいいもんだわね。こうやって家のものを見てるとね。自分の苦勞がかたちになるっていうか。うちの家のソファも、汗水たらして働いた証しよ。このラジオだって、私がサトイモを7サック、市場で売ったお金で買ったのよ。
(Karmina, 30代女性, 2013.03.08)

アエタは、かつての生活では、「毎日食えること」や「子どもが無事に育ってくれること」のために現金を使っていた。たまに現金収入が入れば、コメや塩など、生命をつなぐために最低限必要なものに充てていた。アエタにとって、山の畑を耕すことは、生活の一部であった。したがって、アエタは、対価を求めて汗水たらして「労働」していたわけではなく、山仕事は、自分たちの生命に直結する営みであった。

他方で、市場経済との関わりのなかで、アエタの「ほしいもの」は、増えていった。食器の水切りも、ソファもラジオも、いまやアエタにとってはどれも「必需品」であり、平地民との関わりのなかで「ほしいもの」となった。このように、市場経済が生活に浸透していくと、アエタは、「それもいいもんだわね」と、支配的(平地の)価値にみずからの価値を擦り込んでいった。このようなアエタの変化を、村の長老は、以下のように説明している。

金があれば、買いたいものもたくさん出てくるし、実際に金があれば買える。でも、金がなかったら、なにも手に入れないんだよ。山仕事をしている時代は違っていたがね。(Bapang Luding, 80代男性, 2012.03.25)

市場社会に依存する生活のなかで、アエタの必需品や出費は、増えるばかりであった。しかし、サパには、それらの出費を賄えるほどの

現金収入はなく、必要なものが「手に入れられない」アエタが増えて
いる。また、かならず必需品とはいええない物を買ったり、不必要な出
費をしてしまい、いっそう生活を圧迫することにもなる。たとえば、
自分が持っている携帯電話に対応しないプリペイド・カードやSIMカ
ードを、一枚200ペソも出して買ったり、集落に出入りする行商から
鍋セットや、ローションなどの化粧品を、分割払いで買ったりするこ
とがある。近年では、分割払いの商売が増えて、給料日になると支払
の取立てが家まで来るようになった。支払いが滞っていると、商品
を取り上げられることもある。また、子どもの小遣いも増えた。仕事か
ら帰ってきた親やきょうだいが、小銭を渡したり、子どもが駄々をこ
ねて泣き止まなかつたり、雑貨屋へのお遣いを頼むとき、毎回1~5
ペソ、多いときには一日に10ペソ近く、駄菓子用の小遣いを渡したり
する。アエタの人々は、余裕のある生活をしておらず、わずかな収入
で日々をやりくりしている。子どもの小遣いの10ペソで干し魚や卵を
買えば、家族の一食分のおかずになるはずである。しかしながら、こ
のような発想は、合理的な思考によるものであり、それは市場的な価
値である。

アエタの消費価値の変容は、彼／彼女らが市場経済へ適応したこと
の結果である。以上から、三つのことが明らかになった。一つ、アエ
タは、平地の労働市場や生活様式に移行しているだけではなく、精神
的にも市場的価値に「吸引」されていること。二つ、アエタが新たな
生活のニーズを満たすに必要な現金収入の機会が得られないまま、消
費価値だけが変化していること。三つ、市場社会で必要とされる経済
的性向を身体化する時間もなく、市場的価値に移行していること。こ
うしてアエタは、市場的価値を取り込むものの、その生活は市場社会
における差異化と、市場社会で必要とされる経済的性向の欠如ゆえに、
貧困化の道を辿りつつある。

5 市場社会における排除の構造

本稿では、市場社会における人々の排除の状況を、社会構造と価値世界の2つの側面から描き、その結びつきについて考察した。アエタの厳しい生活の背景には、労働市場で底辺に据え置かれていながら、彼／彼女らが市場社会に積極的に参入しようとしていることがあった。2013年現在、クラーク経済特別区周辺の観光業や平地民の雇用主にとって、「差異を持った労働力」であるアエタは、なくてはならない存在となった。アエタも、平地の労働市場で現金を得る以外に、生き延びる術はない。アエタには、教育を受けたり、マルティンのように、平地の労働スタイルに合わせようとするものだけではなく、ボボンの息子やベルのように、雇用者から仕事への適応を迫られてあらためて、支配的な価値を認識するものもいた。しかし、個人の適応への意欲の程度に関わらず、サパのアエタは、市場社会で生きるために、安価な労働力として労働市場に参入し、差異を克服するよう努めざるを得ない。しかし、アエタが市場社会に適応しようとするほど、その生活は圧迫されていった。このような構造的な排除と文化的な包摂の結びつきこそ、市場社会におけるアエタの排除の姿である。

サパのアエタが本格的に平地の労働市場に参入するようになって、16年経った。サパのアエタの間では、まだ階層分化といえるほどの経済格差は見られない。しかし、アエタの労働が多様化するなか、平地民とアエタの格差だけではなく、アエタの間の格差が拡大することは避けられない。他のアエタ集落では、海外出稼ぎに出る人もおり、サパの若者にも、海外出稼ぎを希望する人が現われている(吉田2013)。また、現在のサパでは、山仕事で生計を立ててきた親世代と、学校教育を受け、平地民と近い環境で育った子・孫世代の間で、労働力の世代交代が始まっている。本稿で調査の対象とした世代は、噴火前に山仕事を経験してきた30代から80代の人々である。しかし今後、世帯の稼ぎ頭となる10代・20代の子・孫世代のアエタたちは、親世代よりも市場的価値に適応しているにもかかわらず、親世代と同じよ

うに非正規の労働に就いている。このような流れのなか、サパのアエタは、どこへ向かうのだろうか。これら次世代のアエタや集落から離れて働くアエタに着目し、市場社会におけるアエタの排除の行方を追うこと、そして、先住民が労働者として市場経済に「吸引」されることの意味をさらに考察すること、これが筆者の今後の課題となる。

注

- 1) 本稿が対象とするアエタの祖先は、1870年代にクリスチャン・フィリピノらが同地域に砂糖キビ農園や稲作地を開墾したとき、山岳部へ追い立てられた人々である(Larkin 1972:73)。その後も、たがいの居住空間は隔てられ、緊張をはらんだ関係を保ち続けた(清水 1990:326)。これらの歴史的背景も踏まえ、本稿では、多数派のクリスチャン・フィリピノのことを平地民と呼ぶ。
- 2) 丹野清人は、「グローバル化に直面している各国が共通に抱える課題」として、グローバル経済を支えている契約労働者の多くが、「労働者」としてではなく、人格的存在を欠いた「労働力」としてしか捉えられていないことを挙げている(丹野 2007:34)。本稿の調査対象者であるアエタも、「労働者」ではなく「労働力」として労働市場に組み込まれている。
- 3) 本稿の調査対象であるサパは、マニラから北西に約100キロ、ルソン島中部の高地に位置する。2012年3月現在の人口は780人、一世帯平均5~8人で186世帯、そのうちアエタ127世帯(68.3%)、平地民38世帯(20.4%)、アエタと平地の家庭が21世帯(11.3%)となっている。サパには幼稚園と小学校(分校のため4年生まで)があるが、5年生以降、平地の学校に進学するアエタは少ない。
- 4) 差異には、民族的な違いとしての「差異」と、排除にともなって創出される〈差異〉がある。もともと平地の市場社会とは異なった世界で生活していたアエタと平地民では、経済生活も文化も異なる。これは「差異」である。アエタはこのような民族性に基づく「差異」をもって市場社会に参入した。しかしその差異は、市場社会のなかで「劣ったもの」、「低位なもの」として「序列的特性に転位」(藤田 1991:121)し、階層化を促すカテゴリーとしての〈差異〉となった。これが、市場社会のなかで後づけされる〈差異〉である。本稿は、包摂と排除の議論に重点を置くため、とくに本文中で「差異」/〈差異〉の表記の区別はしないが、本稿でアエタの「差異」を考察するとき、これらの区別を念頭に置いている。差異に関する議論は、吉田(2012)を参照されたい。
- 5) あるアエタの小学校教諭は大学を卒業しているが、国家試験を受けていないため、現在は非常勤として月に3,000ペソの交通費だけを受け取っている。しかし彼女がアエタであること、すでに3年間

教鞭をとっているという条件があるため、先住民法第 8371 号による先住民の教育や雇用の社会的平等の観点から、マニラの教育省で手続きをすれば、正規雇用になれるはずである。

- 6) フィリピン政府は、観光産業における雇用機会促進対策を進めている。2010年に、国内の観光業関連の労働者数(3,694,000人)は、フィリピンの全労働者数(36,047,000人)の10.2%を占めた[PTSA 2012]。このような地域産業の変容を受けて、先住民を含む地域の労働者も、特別区内での清掃業や建設現場、運転手、リゾート・スタッフ、工芸品販売、ツアーガイドなどの職業に携わるようになる。サパには韓国人が経営しているリゾート・スパがあり、観光省と連携して観光ガイドやマッサージなどのトレーニングが行われている。2013年3月現在、サパのリゾート・スタッフは49人いるが、そのうち46人がアエタである。また、観光省に登録されているツアーガイド39名が全員アエタである。
- 7) たとえば、セールス・レディの場合、遠くにいても客が見つげやすいようにと、身長が求められることがある。また、外資系の工場では、作業台などが欧米サイズなので、身長が足りないと作業ができないことがあり、技術や語学力よりも、身長が優先されることがある。あるカナダ系の工場では、男性の身長制限を5.7Feet(約173cm)にしたところ、適任者が集まらず、英語の読み書きはできないが長身という男性(5.11feet)が採用されている。このようにフィリピンでは、製造業やサービス業において雇用の際に身長が重視されることが多い。一方、アエタの場合、平地民と比べて身長が低く、男性でも160cmに満たないことが多い。
- 8) たとえば、あるファーストフード店では、学歴(大学卒業もしくは大学二年レベル)、英語でのコミュニケーション能力、年齢18~25歳、身長制限(女性の場合157.5cm以上)、健康な人という条件が課されている。それに加えて、履歴書、大学の成績証明書および推薦状、無犯罪証明書、社会保障 Social Security System、健康保険 Phil-health、住居ローンの掛け金 Pag-ibig fund、健康診断書(薬物検査、レントゲン、検尿、検便)、行政による食品衛生セミナーの修了証明書などの書類の提出が求められる。
- 9) またサパのアエタは、コメなどの食糧や生活必需品を雑貨屋で買うが、店主によると一世帯一ヶ月当たりの平均のつけ額は4,000ペソだという。ここからも、収入をほぼ全額つけの支払いに充てるという、アエタの厳しい家計状況が分かる。
- 10) フィリピン労働法では、試用期間が6ヶ月を超えると正規に雇用されなければならない。また、非正規雇用されている場合でも、一年目から正規雇用になる。そのため、サパのアエタの多くが、5ヶ月もしくは一年未満の契約期間を結んでいる。仕事内容にもよるが、1~2ヶ月間の休みの後、ふたたび非正規として雇用される。ある会社では、産休等、やむを得ない事情での休職は認められるが、復

帰後はふたたび初月給からのスタートとなる。また、観光業では、オフシーズンや客が少ないときには、数週間の無給休暇を取らされることもある。

- 11) これには、平地民と比べて、アエタが契約時に雇用主に詳細を聞かないという事情もある。しかし、雇用主からあえて詳細を説明しないという点からも、アエタを便利な労働力として利用する雇用主の意図が知られる。

参考文献

- 青木舞, 2004, 「先住民アエタ女性の生活史—女性と社会変動」明治学院大学大学院社会学研究科修士論文。
- Ajit S, Bhalla, Frederic Lapeyre, 1999, *Poverty and Exclusion in a Global World*, 2nd edition (=2005, 福原ほか監訳『グローバル化と社会的排除—貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂.)
- Bauman, Zygmunt.1998, *Work, Consumerism and the New Poor* (2nd Edition). Open University Press, UK Ltd. (=2008, 伊藤茂訳『新しい貧困—労働、消費主義、ニューブア』青土社.)
- Bourdieu, Pierre, 1977, *Algérie 60: Structures économiques et structures temporelles*, Paris: Éditions de Minuit (=1993, 原山哲訳『資本主義のハビトゥス—アルジェリアの矛盾』藤原書店.)
- Byrne, David, 2005, *Social exclusion*, Second Edition, Berkshire: Open University Press (=2010, 深井英喜ほか訳『社会的排除とは何か』こぶし書房.)
- Castells, 1999, *Global Economy, Information Society, Cities and Regions*. (=1999, 大澤善信訳『都市・情報・グローバル経済』青木書店.)
- 石岡文昇, 2013, 「ブルデューの強制移住論—根こぎの形成をめぐる方法的予備考察」『理論と動態』第 6 号, 2—12.
- 岩田正美, 2008, 『社会的排除—参加の欠如・不確かな帰属』有斐閣。
- 岩田正美, 西澤晃彦編著, 2005, 『貧困と社会的排除—福祉社会を蝕むもの』ミネルヴァ書房。
- Larkin, John, 1972, *The Pampangans: Colonial Society in a Philippine Province*, Berkeley: University of California Press.

- 藤田英典,1991,「近代社会の階層的再生産メカニズム」宮島喬ほか編『文化と社会—差異化・構造化・再生産』有信堂.
- Merton, Robert, 1949, *Social Theory and Social Structure : Toward the Codification of Theory and Research*, The Free Press (=1961, 森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房.)
- 西澤晃彦, 2010, 『貧困の領域—誰が排除されているのか』河出書房新社.
- Philippine Tourism Satellite Account (PTSA) ,2012, *Table 7 Total Employment in the Philippines and Employment in Tourism Industries, 2001 - 2011*, (<http://www.nscb.gov.ph/stats/ptsa/statistics.asp>, 2013.03.03).
- 関恒樹, 2013, 「スラムの貧困統治にみる包摂と非包摂—フィリピンにおける条件付き現金給付の事例から」『アジア経済』第54巻第一号, 47-80.
- 清水展, 1990, 『出来事の民族誌—フィリピン・ネグリート社会の変化と持続』九州大学出版会.
- 丹野清人, 2007, 『越境する雇用システムと外国人労働者』東京大学出版会.
- 吉田舞, 2010, 「フィリピン先住民女性と社会変動—アエタ族における婚資制度の変容」『明治学院大学大学院社会学研究科社会学専攻紀要』第34号, 1-12.
- , 2012, 「先住民の労働にみる差異化と全体的底辺化—ピナトゥボ・アエタと地方労働市場」『理論と動態』第5号, 94-111.
- , 2013, 「都市先住民のネットワーク—フィリピン・マニラの事例から」『部落解放研究』第19号, 141-161.
- Young, Jock, 2007, *The Vertigo of Late Modernity*, Sage (=2008, 木下ちがや訳『後期近代の眩暈—排除から過剰包摂へ』青土社.)
- Republic of the Philippines, Department of Labor and Employment, National Wages and Productivity Commission, 2013, *Daily Minimum Wage Rates, Region III, Central Luzon*

(http://www.nwpc.dole.gov.ph/pages/region_3/cmwr_table_r3.html,
2013.03.18).

Republic of the Philippines, Indigenous People Rights Act ,1997, Republic
Act No.8371, Philippines

(よしだ まい・首都大学東京大学院人文科学研究科)

The Meaning of Encountering Market Society A case of Pinatubo Aetas in the Philippines

YOSHIDA Mai

Graduate School of Humanities,
Tokyo Metropolitan University

This paper discusses the social exclusion of the Pinatubo Aetas, a group of indigenous people in the Philippines, who were pushed to join the market economy immediately after eruption of Mt. Pinatubo in 1991. Since their entry into the labor market, the Aetas' nature of work and values has been changing as they are physically and culturally incorporated into the market.

However, when the Aetas enter the local labor market, they are tagged as “indigenous people” and categorized as non-skilled laborers, which result in their marginalization. The Aetas eventually try to acquire the values and labor skills of the dominant market to sustain their livelihood and escape poverty. However, because of lack of access to market resources, they remain trapped in poverty. From a social perspective, the Aetas are excluded in the labor market, although they are culturally included in the market value system. This paper points out these processes as being part of a structure of the Aetas' social exclusion. Further, this paper examines the linkage of this exclusion and the cultural inclusion of the Aetas. In a previous study on social exclusion, the phenomenon of exclusion was discussed within the context of social structures such as labor market, civil society, and state. The Aetas are not only marginalized by existing social structures; their value system is also gradually endangered as they are forced to acquire new skills and adapt to the market value system to survive.

This paper examines specific examples of Aetas in the labor market from these viewpoints to capture the process and meaning of their inclusion in the market society.

Keywords: indigenous people, social exclusion, cultural inclusion